名誉総裁　年頭挨拶

新年あけましておめでとうございます。

本年も、全国の救難所員の皆様が、
海上における、人命、船舶の救済に力を尽くし、
海上産業の発展と海上交通の安全確保に
寄与されますとともに、
国民の皆様から益々信頼され、
発展を遂げられますことを願っております。

平成30年1月1日
公益社団法人　日本水難救済会
名誉総裁　**憲仁親王妃久子**

年頭挨拶

平成30年の年頭にあたり
海上の安全と安心のための
皆様のご活躍を祈念申し上げます。

公益社団法人 日本水難救済会
会長 **相原（あいはら）　力（つとむ）**

平成30年の年頭にあたり、全国の地方水難救済会をはじめ各地の救難所・支所の救難所員とその活動を支えておられるご家族の皆様、洋上救急や青い羽根募金活動に携わっていただいている皆様に、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

全国の救難所員等の皆様におかれましては、昼夜を問わず海難救助出動等にご尽力をいただいており、関係者の皆様に心から敬意を表します。

海の現場での海難救助活動は荒天下あるいは夜間での作業を余儀なくされ、救助活動をされる救難所員の方々に危険が迫ることが多く、そのご苦労は大変なことと思います。日本水難救済会は明治22年の創設以来、平成29年12月末までに救難所員の皆様のご活躍により、全国で累計196,857人の尊い人命を救助してきた実績を誇っており、昨年は12月末までに全国で264件の海難に対応し、265名、105隻の船舶を救助し、沿岸における海難救助に多大な成果を上げることができました。

また、昨年6月に開催された名誉総裁表彰式典において、平成28年8月21日に下田市須崎の磯場で釣人3名が海中転落し、救助出動の要請を受けた下田救難所の救助員6名が直ちに救助船に乗船して、台風9号の影響により磯波が高く多数の岩礁が存在する危険な海域において、救命胴衣を未着用で漂流中の3名を発見し、巧みな操船により救助員が一致協力して全員を船内に引き上げ救助するとともに、意識を失って心肺停止状態になった1名については心肺蘇生措置を施し、救助した他の2名とともに消防の救急隊に引き継いだ海難救助事案につきまして、名誉総裁表彰を受章されました。

これも偏に、これまで水難救済に携わられてきた皆様の崇高なボランティア精神に依るものであり、深く敬意を表するものです。

洋上救急につきましては、昨年は27件の出動があり、また、洋上救急制度創設以来、平成29年末までに延べ876件の出動が行われております。洋上救急制度は海上を活動の場とする船員やそのご家族の安心をもたらすものとして、関係の皆様からも高く評価されております。今後とも一層の充実を図って参る所存でございますので、さらなるご支援をよろしくお願いいたします。

青い羽根募金につきましては、昨年も海上保安庁をはじめ国土交通省、消防庁、水産庁、防衛省などの国の機関のほか、各種企業や海洋少年団などのご協力をいただき、青い羽根募金活動はもとより、青い羽根募金支援自販機の設置箇所の増にも取り組んで頂きましたことにより、多大な成果がございました。関係の皆様に御礼を申し上げますとともに、更なる拡大を期待しておりますので皆様のご協力をよろしくお願い致します。

日本水難救済会は、約52,000人のボランティア救助員の活動の支援のため、本年も的確な運営を推進していく所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。

年頭から厳しい環境の中、全国各地で活動している救難所員をはじめ関係者の皆様のご健勝とますますのご発展をご祈念申し上げ、新年のご挨拶といたします。

年頭挨拶

平成30年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

海上保安庁長官
中島（なかじま）　敏（さとし）

公益社団法人日本水難救済会におかれましては、明治22年の設立以来、128年間の長きにわたり代々受け継がれてこられた崇高なボランティア精神のもと、これまでに約20万人の尊い人命と約4万隻の船舶を救助されるという輝かしい実績を築き上げてこられました。これは、生業が在る中、尊い人命の救助のため、献身的に活動されている全国各地の約5万2千人に上る救難所員の皆様の御活躍によるものであり、心から敬意を表します。

さて、昨年の海上保安庁を取り巻く人命救助に関する状況を振り返りますと、2月の鹿児島県諏訪之瀬島沖タンカー座礁事故において乗組員18名全員を無事救助した事案をはじめとする様々な海難に対応いたしました。また、7月の九州北部豪雨災害への対応や、9月のメキシコにおける地震被害に対する国際緊急援助隊の派遣といった陸上災害への救助活動が社会的に注目された1年でした。

我が国周辺海域における海難の発生状況を見てみますと、毎年1,000人以上の死亡・行方不明者が発生し、2,000隻以上の船舶事故が発生しているのが現状であり、海上保安庁では、巡視船艇・航空機の整備・高機能化とともに、ヘリコプターからの降下、潜水、救急救命といった技術力の向上など、救助・救急体制の充実強化に鋭意取り組んでいるところです。

しかしながら、広大な我が国沿岸域において発生する船舶海難や人身事故への迅速かつ的確な対応、また、昨今本邦への寄港が急増している大型クルーズ船の万一の事故への対応には、海上保安庁などの公的救助機関の勢力のみでは十分とは言えず、民間救助機関との連携が必要不可欠となります。全国1,300箇所余りに配置され、地域に密着した活動を行っている水難救済会関係者の皆様の御活動、更には、地方自治体と地方水難救済会との協定に基づく、地震・津波等による災害発生時の御対応については、海上保安庁において非常に心強いものであり、今後も合同訓練などを実施し、緊密な連携を図っていきたいと思っております。

また、洋上救急事業におきましては、昭和60年の運用開始以来、協力医療機関の御協力のもと、医師・看護師の方々には日夜を問わず、巡視船艇や航空機に同乗のうえ、献身的に往診などに当たっていただき、日本の周辺海域を航行する船舶に乗り組む日本人船員に限らず、外国人船員も含めて、これまでに900人以上の傷病者が救助されております。この事業は、海上の傷病者を救う世界唯一のシステムであり、日本船舶のみならず、外国船舶からも高い評価を得ており、本事業の一翼を担う海上保安庁といたしましても、緊密に連携し、迅速な救急活動の実施に努めていく所存でありますので、引き続き関係者の皆様の御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後に、全国各地において、日夜海難救助や洋上救急に献身的に御尽力されている関係者の皆様の御健勝と、公益社団法人日本水難救済会の益々の御発展を祈念いたしまして、私の新年の挨拶とさせていただきます。

年頭挨拶

「戌」の年を迎えて

公益社団法人 日本水難救済会
理事長　向田（むかいだ）　昌幸（まさゆき）

新年明けまして　おめでとうございます。

日頃から昼夜を分かつことなく、沿岸海域での水難救済活動や遥か洋上での救急医療活動に献身的に勤しんでおられる全国の地方水難救済会及び救急医療機関の関係各位をはじめ、いつも惜しみないご指導ご支援を賜わっている国や地方自治体の関係機関並びに海事・漁業・医療等の関係団体の皆さまに心より新春のお慶びを申し上げます。

さて、周囲を海に囲まれたわが国では、沿岸海域における船舶海難や海浜事故が後を絶ちません。今日では、海上保安庁や警察・消防に代表される国や地方自治体による公的な海の救難体制もかなり充実して参りましたが、それでも小さな島国とはいえ、わが国は世界屈指の長大な海岸線を有するだけに、公的な救難勢力だけでは迅速かつ的確に救助の手を差し延べることは困難です。まして、戦後間もなく海上保安庁が誕生するまでの公的な海の救難勢力と言えば、主要な港湾水域では水上警察が、それ以外の外洋に面した沿岸海域では海軍が掛け持ちするという状況でしたから、今とは比較にならないほど貧弱な体制だったことは容易に想像できます。そこで、それを補完する役割を託されたのが本会の前身である大日本帝国水難救済会でした。同会は、1889（明治22）年11月にわが国初の海の民間救難ボランティア組織として誕生しましたが、それから今年で129年目を迎えることになります。

公的な海の救難体制を補完するという重要な社会的使命は今でも変わっておりませんが、ここ数年来、全国各地で地震・津波・台風・大雨洪水等による大規模な自然災害が相次いでいるほか、諸外国では大型客船の海難やテロ等が散発していますので、わが国としても常に様々な形の大規模災害への備えに万全を期さねばならないという観点からしますと、本会及び地方水難救済会の社会的重要性はむしろ従前にも増して益々大きくなっているものと認識しております。

現在、全国の沿岸道府県には40の地方水難救済組織が設立されており、それらの傘下にある救難所等が全国津々浦々に計約1,300か所設置され、それらを拠点に総勢約52,000名の民間ボランティア救助員の皆さんが昼夜を問わず献身的な捜索救助活動に勤しんでおられます。そして、明治以来これまでの救助実績は、約196,900名の人命と約4万隻近くの船舶を救助しており、最近の3ヶ年の年平均でも、322名の人命と128隻の船舶を救助するという素晴らしい実績を誇っています。

一方、本会の運営する洋上での救急医療活動でも輝かしい成果を挙げています。1985（昭和60）年10月に正式に制度化されて以来これまでの32年間における出動実績は、900名近い重篤な傷病者救急救命のために、全国147の協力医療機関の中から延べ1,600名以上の医師・看護師の皆さんが慣れない洋上に、しかも時として荒天暗夜を衝いて出動されています。その内訳を見ますと、最近では外国籍の船舶や船員の割合が増加傾向にあって、全体の4割を超える状況になっています。その分、国籍の如何を問わず、世界で唯一のこの洋上救急制度に対する高い評価と厚い信頼が寄せられています。

以上のように、本会の基幹事業である沿岸海域での水難救済活動と遥か洋上での救急医療活動の双方において、これまでの長い歴史と伝統に恥じることなく、素晴らしい実績を積み重ね続けていることを誠に光栄かつ誇らしく思っていますが、それも、現場で献身的に活躍されている救助員と医師・看護師の皆さんはもとより、日頃から惜しみないご支援を賜わっている多くの関係各位のお陰であり、改めて心より感謝申し上げる次第です。

ところで、本年の干支は「戊戌（つちのえいぬ）」です。戊の字は「茂」に通じて「植物の成長が絶頂期にある」と、また“戌（いぬ）”は「滅」（めつ「ほろぶ」）で「草木が枯れる状態を表す」とされ、戊と戌は同じ気が重なるとその気は盛んになり、その結果が良いときはますます良く、逆に悪いときはますます悪くなる比和の関係にあるのだそうです。そうだとしますと、見事に花開くのか、それとも枯れてしまうのか、まさに本年は本会にとって正念場ということになりますが、何としてもみごとに花を咲かせ開かせ実り多い年にしたいと願っております。皆さま方におかれましても、日常的な水難救助活動や洋上救急医療活動はもとより、大規模な災害への備えにも万全を期して頂きながら、安全に大輪の花の咲く実り多い年となりますよう心より祈念申し上げ、年頭のごあいさつと致します。